

# 寺と庭ガイド

※題字／森川芳聲

## もくじ

- 2 巻頭言“志明館の日々”……………山口 秀範
- 3 鄙爺日記その②……………猪部 敬彦
- 4 偉人レポート……………齊藤 啓亮
- 6 『歴史と記憶』感想……………今林 賢郁
- 8 **新連載**“この一冊”……………山口 秀範
- 9 死支度と友情③……………廣木 寧
- 10 TERAKOYAふおとればーと
- 11 “あちこちde寺子屋”のご案内
- 12 山とものがたり(1) 編輯余録 余録の余録



青の洞門

耶馬溪

大分県中津市

※詳しい解説は12頁に掲載しています

# 志明館の日々

代表世話役

山口 秀範

吉田松陰の本質

八年前から毎月の寺子屋勉強会で読

み続けている吉田松陰の『講孟簡記』は  
ようやく最終章「尽心下篇」に入ってい

叱り方  
毎月一度教師たちの全体研修で、森信三の『修身教授録』を読んでいます。前回は「松陰先生の片鱗」と題する一文でした。

「先生は今日、ともすればいわゆる志士という概念によつて、非常に厳しい方で、うっかりすれば怒鳴りつけられそうなきびしい方というふうにならされているようですが、事実はまるで違うようです。・・・とくに生徒に対しては実に穏やかであつて、かつて先生に大声で叱られた者がないということ、直接当時の門弟の人々から語り伝えられているということがあります。」

日々生徒たちに向き合い指導している教師たちは、ともすれば声を荒げて叱正しがちになります。私も偉人伝の授業で、私語の止まない、或いは集中力の途切れる子らに、声を上げて注意を促すことがあります。森の次の指摘はこの点に関わっています。

「大声で生徒を叱らねばならぬということは、それ自身、その人の貫禄の足りない何よりの証拠です。つまりその先生が、真に偉大な人格であつたならば、何ら叱らずとも門弟たちは心から悦服するはずであります。」

「悦服」という言葉は『報徳記』にも見られ、二宮尊徳が相馬藩の復興を指導するくだりで「凡そ天下の生物無量なりといへども血気あるもの施与の道を厚くして悦服せざるものあらざる也」―命あるものはすべて、自分に必要なものを与えてくれる相手に「悦服（喜んで懐く）」する―と確信を持って論じています。

教師たるもの、生徒が悦服する段階まで自らを高める努力を続けたいものです。

ます。第十八・十九章では孟子が「孔子のような聖人でも誹謗中傷や災難に遭うことがある」と説いたことについて松陰は、聖人君子を理解する器量のない「小人」を三種類に分類しました。即ち①愚夫（全くものを考へぬ人）②俗人（志も気概もなく世間に流される輩）③俗儒（自分の知識のなさを隠すために学問を利用する似非教養人）です。

これら小人は実は自らの欠点に気づいているから、殊更に君子を見ては恐れ憚るのだと松陰は観察しています。続いて松陰は「自分の言動は篤敬でも忠信でもないが、人のあら捜しをせず善のみ見ているので、世間から嫌われていない」と自己分析をしつつ、しかし一方では兵学を家業とし武士道の実践を心がけそれに命を賭けているから、「心が激すると危難に飛び込み狂人ぶりを発揮してしまうので、三種の小人たちは私を恐れ憎むが、私自身はそれに些かも動じず、却つて古人を自らに比べて我が身を励ましている」と、信念を吐露するのです。

森の言うように「生徒に対しては実に穏やか」な松陰は、「己の武士道が試される事柄に遭えば命がけの「狂」を発揮してしまう。その二面性が吉田松陰の魅力を際立たせるのでしょう。」

## 和歌に親しむ

志明館の特徴ある教育のつは「発憤」学習です。自ら課題を見つけて自ら解決に取り組む習慣を身につけることを目指しています。その一環で三年生は「和歌創作」に取り組めます。千数百年前から祖先たちが読み

続けた和歌、五七五七七のリズムに乗せて表現してきたのは自然の二コマ、自己の鍛錬や人々との心のふれあいを通じての「感動」でした。そう解説した上で、  
忘らむて野行き山行き我来れど我が父母は忘れせぬか  
も  
（防人の若者）

父母もその父母もわが身なりわれを愛せよわれを敬せよ  
親思ふところにまさる親心けふのおとづれ何と聞くらむ  
（二宮尊徳）

この三首をお手本として示し、左のような用紙を配り、初めての「歌作り」に挑戦させました。その成果は以下の通りです。

しおひがり しおをまいたら 待つといて ピンでてくる マテ貝さんだ

万博は おおやねりング すごかった せかいの国にいきたくなった  
おおなわで たのしくとんだ チーム戦 かつてもまけても えがおいっぱい  
動物園 あるきつかれて すわったら まわりにきこえる いろんななきごえ

## 大人の人格が問われる

生徒たちの素直な目、柔らかな感性が、飾り気のない表現に溢れています。「大人が子供の能力・成長力を見くびっているのが日本の初等教育の停滞の主因だ」と日頃から声を大にして訴えています。これらの作品もその証の一つでしょう。

生徒たちはいつでも「悦服」出来る機会を待っている。接する大人―教師も保護者も―こそ自らの人格を磨かねばなりません。